

毎日俳壇

西村 和子 選

井上 康明 選

片山由美子 選

小川 軽舟 選

日本語を覚えて帰るつばめあらん

東京 東賢三郎

＜評＞人間界のそばに巣を作るつばめだから、毎日聞き慣れた簡単な日本語は覚えてたかも知れない。想像が広がって楽しい。

病床もよしと思へる猛暑かな

明石市 吉室 燐

＜評＞身の危険を感じるほどの猛暑の日々。こんな発想の転換も救いとなることだろう。

穴感そよそよと章の揺れ

東京 望月 清彦

会釈では済ませず豊む秋日傘

千葉市 笹沼 郁夫

葛桜雑談済みて本題に

久喜市 利根川輝紀

夕暮のラジオを消せば蟬の声

小田原市 林 梢

茄子漬や赤絵唐草平小鉢

尼崎市 森下久美子

藪枯らし納屋の補修のはかどぞ

伊勢市 奥田 豊

鮎屑ふわりと透けて今朝の秋

国分寺市 野々村澄夫

白木権士蔵に鏡ひし南京錠

松山市 井上 保子

故郷には兄との月日ほどとぎす

唐津市 梶山 守

＜評＞ホトトギスの鋭い声を聞く、幼いころ兄と遊んだ故郷の山野、その歳月を思い出す。郷里を離れて、何十年も過ぎたけれど、天高し遺跡の丘へ犬放つ

春日市 林田 久子

＜評＞秋天の下、古代の遺跡が保存された広々とした丘へ犬を放つ。犬は、一気走り出す。ペランダの二百十日の風の塵

宇都宮市 手塚 康雄

美しく群れて水のむ秋の蝶

高松市 島田 章平

美しく群れて水のむ秋の蝶

小平市 中澤 清

独り旅ヒサの斜塔に星流れ

取手市 山 朋彦

地蔵堂の中にもはげし蟬の声

久留米市 持地 恒美

美石榴の何か叫んでをりにけり

久喜市 利根川輝紀

鉛筆に社名の入る残暑かな

古賀市 大野 兼司

梅干のふたつのにぎり繻日和

姫路市 板谷 繁

ふれてみて今日のいちじく挽きにけり

西宮市 平田 あい

＜評＞程よく熟さなければ甘さが足りず、熟しすぎると傷みやすい。そっと触れて見極めるというのがいかにもイチジクらしい。

山形 佐藤美和緒

＜評＞炎天下を進む蛇の影が地にくっきりと。影のほろが濃く見えるといつのが不気味さを増す。

日盛りを来て本堂の暗さかな

福島 渡辺 俊子

秋暑したびたび覗く万歩計

鎌ヶ谷市 海野 公生

指で溶く真白き胡月涼し

国分寺市 野々村澄夫

シベリアを知る父歎す終戦日

和歌山市 櫻井なほみ

かなかなや典座の運ぶ朝の膳

和歌山市 中筋のぶ子

稜線に日の残りあて月見草

日高市 荻葉 昭子

子の手紙また読み返すちろ虫

和歌山 桑原 里美

せせらぎが水の香運ぶ星月夜

姫路市 三木 崇弘

残照の水書遺構鳥渡る

吹田市 坂口 銀海

＜評＞東日本大震災では震災遺構の保存の是非が論じられた。こちらは水書。押し黙る水書遺構がおそろかに見える。

桜川市 海老原順子

＜評＞暑さにだらけた自分に気合を入れる。こんなやり方もあったかと感心した。

床拭いて心涼しくなりにけり

日向市 内田 遊木

決算書類にかぶせて履履かな

東京 野上 卓

近づけば音伸し掛かる瀑布かな

四條畷市 中尾 謙三

カーテンに揺るる葉影や伍ビール

神戸市 小林 照明

早退のヤングケアラア鳳仙花

神戸市 林山 千港

鉄臭き美家の水や熱帯夜

岡山市 貝畑 信行

米蔵の南京錠や初嵐

さいたま市 池田 雅夫

鯉跳ねて濠の匂へる秋暑かな

和歌山市 福本 秀昭

うたは奏でる

佐クマサトシの歌

染野太朗

佐クマサトシの第一歌集『標準時』がおもしろい。

・クリスマス・ソングが好きだ クリスマス・ソングが好きだというのは嘘だ

よく引用され考察されているのはこんな歌。叙情よりも論理、感情よりも思考を先立たせたような歌で、ふしぎな魅力がある。では次のような歌はどうか。

・席を立つときそのままいいですと言われた 春の花瓶の横で

叙情の気配はある。セルフサービスの飲食店だろう。使った食器類を自分で返却したりプラスチックの飲み残しを指定されたところに流したり。それをしなくてよいと言われた。そこにたまたまあった花瓶。「春の」は、そう言われたときの少し嬉しいような心情をやらなく滲ませているようにも思うが、一方で、ごく形式的に、半ば自動的に付与された言葉のようにも感じられる。作者の内面を掴み切れない歌だと思ふ。ただ、一つ確かなのは、これがまさに現在の都市空間における一場面をリアルに捉えた歌だということ。現代のシステムと人間とのあいだに生まれた一瞬の物語がここにある。

・右に君、左に知らない人がいて、知らない人の読んでいる本

もし「知らない人」が「母親」や「嫌いな人」ならば、多少はわかりやすい歌だったのかもしれない。でも私たちは確かに、そのような「知らない人」に多く囲まれているし、例えばその人の読む本に淡く関心を向けたりする。

飄々とした態度を保ちながら現在を鋭く捉える、注目すべき一冊だ。

(そのの・たろう)歌人